

『科学基礎論研究』に問う科学基礎論

中根美知代
(立教大学理学部)

1. はじめに

入会案内によれば、科学基礎論学会とは「科学の基礎」(かっこつき)に関する学会であるという。数学出身で科学史に転じた報告者は、これを、「科学史や数学を学び研究していく過程で出会った問題で、重要かつ学術的に考察する価値があるが、その学科の中で論じることが難しい事柄」と判断した。たとえば、「数学で厳密とは具体的に何を意味するか」「物理学の数学化とはなにか」といった問題である。これらを扱った論考は『科学基礎論研究』の査読を通ったので、一応、科学基礎論の範疇にあるのだろう。この個人的見解は、編集委員会には受け入れられた。別の会員は異なる見解を持っているだろうが、その多くをおそらく報告者も受け入れるだろう。会員内にこのような関係があれば、学会としてはそれで十分である。しかし、科学基礎論教育を取り上げるときには、科学基礎論の像を外部に向かって示す必要が出てくる。学会外に向けて発信できる共通の見解が明示できないことには議論が進まない。今回は、『科学基礎論研究』を創刊号から振り返り、科学基礎論とは何かを考える手がかりを探したい。

2. 科学基礎論学会創立をめぐる

『科学基礎論研究』創刊号(1954年)に、初代会長理事高木貞二は、20世紀初頭の相対論と量子論の形成が、さまざまな科学の諸領域の基礎的問題に取り組んでいる人々に影響を与えたことを述べる。そのうえで、この問題に取り組む人々は、研究領域がどこにあっても、共通の基盤に突き当たり、方法論的に同じような問題に直面することを感じ始めているとし、領域を超えて基礎的な問題を論じようとする場が科学基礎論学会としている。なお、同号には、末綱恕一が記したと思われる“「科学基礎論学会」の創立と研究誌発刊について”と題する一文がある。そこでは、① *Philosophy of Science* の邦名として「科学哲学」と「科学基礎論」の候補が上がったが、会の性質をできるだけ幅の広いものにしてゆきたいとの現実的考慮から後者を選んだこと、②最近「科学基礎論国際連合」(*Union Internationale de Philosophie des Science*)が結成され、日本でもこれに応じる学会の設立を要請してきたという事情が紹介されている。なお、創立時の例会の参加者は65名だった。つまり、「科学基礎論」という学問分野の専門家のための学術的会合の場ではなく、科学の基礎に興味を持つ人たちの集まりという性格の学会だったのである。

3. 科学基礎論をめぐる議論

『科学基礎論研究』では、何号かに一度、特集が組まれる。他の学会に比して特徴的なのは、「科学基礎論とは何か」を論じる特集（おそらく年会時にシンポジウムのようなものが組まれたのであろう）が何回か組まれているのである。この話題に関して、特集記事に加えて目についたものを挙げてみよう。

1962年 Vol.6-No.1: 論文応募規定が明示される。「科学基礎論 (logic, methodology and philosophy of science) に関係のあるもの。内容は自由で多方面にわたってよいと思われませんが、基礎的事項として、各分野の人々が理解でき、興味を持ちうるもの。」この規定は今日でも受け継がれている。

1966年 Vol.7,No.4: 「特集・科学基礎論について」

1971年 Vol.10-No.2: 末綱恕一への追悼のなかで、学会成立の歴史に関する記事。この号には、「科学基礎論を専門とする人が極めて小数で、あとは、他の専攻をもつ人で科学の基礎に興味をもつ人の集まりである」との林知己夫の記載がある。

1974年 Vol.12-No.1: 「特集・学問の方法」(1973年科研総合B「学問の方法及び分類に関する科学基礎論的研究」の補助を受ける。)

1975年 Vol.12-No.1: 「特集・科学基礎論とは何か」

1977年 Vol.13-No.2: 「特集・科学基礎論小史」

1977年 Vol.13-No.3: 林知己夫「科学基礎論研究第50号発刊に際して」

“科学基礎論とは何かを考えつつ科学の基礎について広く深く考えていくのが学会の目的”と記す。

1981年 Vol.16- Nos1,2: 「特集・科学基礎論とは何か」

このような機会に何人かの人々が、科学基礎論について各自が考えるところを発言しているが、結局まとまっていない。1981年を最後に、科学基礎論を考えるような特集記事はなくなった。合意が形成されたというより、そのような問題への関心が薄れたためであろう。

4. 科学基礎論学会の当初の理念は受け継がれているのか

上記の議論以外ものも含めて『科学基礎論研究』の特集記事を見ると、文系理系を問わず、関心を持つような話題が取り上げられている。そして、さまざまな分野からの報告がなされる。一つの問題であつてもさまざまな切り方があることを知ることには出来るが、それらの違いを理解した上で、共通の問題関心を探ろうとか、違いを乗り越えて新たな知見を導き出そうというところまで議論が深まっていない。科学基礎論学会が目指すところは、この水準にまで議論を深めることではないだろうか。そして、このことを目標として明確に意識するべきではないだろうか。

そうだとすれば、科学基礎論教育は「科学基礎論」という科目を教えることではない。科学の基礎を語れる仲間に入っていけるような人たちを養成することである。

そこで飛び交う共通の術語や表現を取り上げ、それらは、分野によって違う位置づけや意味で語られるということ、その総体を会員が共有することがまずなされるべきだろう。その中には、現在は学校教育の中で教えられていないが、文系理系を問わず一市民として知っておくのが望ましい事柄がある。それを特定してから教育の問題へと進んでいくのがいいように思われる。